

## 学驚特攻の飛行訓練

神奈川県 中丸敏夫

敗戦当時は物資不足ですが配給制度の生活だったので我が家の商売も以前のようには出来ず、何とか細々ながら商売を続けている状態でした。そして、昭和二十四年に兄がシベリア抑留から帰って来たのです。兄弟無事に郷里に帰ることの出来たことに両親は涙を流して喜びました。家業は兄が引き継いでやることになったので、私は現「東洋レーヨン工場」に入社しました。

戦後六十年、平和な世の中が続いた我が国は、平和な世界を恒久的に持続することを切望するものです。

私は日本料理店を経営していた父・又一（昭和十一（一九三六）年死亡、母・モト平成四（一九九二）年死亡）の長男として生まれました。兄弟は弟・昭彦、妹・茂子、弟・英一の三人で以上六人家族でした。

昭和十八年徴兵検査を受け甲種合格で海軍の調書を貰ったのですが、入営前に大学専門学校卒業及び卒業見込の者に対する新制度による陸軍特別操縦見習士官の募集が施行されたためにそちらを受験し、十月一日に宇都宮陸軍飛行学校へ入学しました。

入学当初から見習士官の階級を与えられ、地上訓練七日間のみで、十月八日からは早くも飛行訓練を実施されました。特別操縦見習士官第一期生で、学校は栃木県清原村にありました。

訓練が進んだ十月二十五日、急にパラチフスが発病しました。その時は四十九人の患者が出て、私も五十日間入院しました。私は退院した昭和十九年二月十五日から第二期生としての飛行訓練を受けました。

私は入隊前から飛行経験があり、昭和十六年には神奈川県立厚木中学校で、中学校としては国内最初のグライダー部を創設した同校グライダー部に入学し、五年間継続して滑空訓練を受けました。また同校は他に例を見ない高級機まで所有し、第一回関東地方選抜中等学校グライダー大会に出場し、当時の木戸文部大臣から金房の優勝旗を授与され、また紀元二六〇〇年祝賀の神宮大会には模範滑空で出場しました。

全国中学校校長会議にも模範演技を披露し、文部省滑空訓練教程映画にも主演したなどの経験がありました。このため入隊後も初日から操縦が出来たことから教官を命ぜられたものと思っています。

戦時中の物資の無い時代、食料の不足の時にはこんな話は出来なかったのですが、航空搭乗員に対する糧食給与などは地上勤務の高級将校までがとうもろこし、栗、さつまいも等を混入した麦主体の飯を食べていたのですが、同じ食卓で食べていながら空中勤務者は当時は白米の飯に肉、魚、卵、牛乳等は毎食支給され、操縦者は高空で気圧の低い所へ行くと腸内のガスが膨張して腹部不快を起すのを防止するため、雑穀を避けて消化の良い純米の飯を支給されていました。さらに体力を維持するため動物性の肉や魚の脂肪分は毎食支給されていました。

学徒出陣の操縦学生まで食事はほぼ同様でした。操縦教官にはこの外に煙草「金鶏ゴールドペンバット」「ほまれ」を毎日二個ほど配布され、また酒類「航空元気酒」「航空ぶどう酒」「ビタミンC酒」いずれも七二〇ミリリットル瓶が日曜を除き交互に一週に六本、このほか営外居住者（下宿者）には一カ月にウイスキー二本、さらに営外居住者に

は清酒一升瓶一カ月に一本、甘味品として板チョコと航空鉄飴とが毎日交互に一枚、酸素希薄の高空で血中の酸素補給を促す酸化鉄入りドロップ（十個入り）が週二個く三個が支給されていました。

給与については地上部隊の陸軍少尉で一カ月七十円程度です。当時の小学校の教員は初任給が三十七円程度の時です。また操縦教官の少尉は基本給七十円に飛行時間による航空加俸、練習生を乗せる危険加俸及び夜間飛行加俸、海上飛行危険加俸等が付加されて、毎月の給料は二百八十円程度支給されました。また宇都宮から大阪く京都へ飛行機の受領に行くと、一回につき同程度の支給が貰えました。

こうした新制度の陸軍特別操縦見習士官第一期生は、昭和十八年十月一日、戦時中の大学専門学校卒業生または卒業見込みの学生から適正検査、学科試験の結果採用されて入隊しました。入隊初日から見習士官の肩章をつけ、軍刀を提げての営

ことをやれ」との言葉に、特殊飛行以外のあらゆる飛行を試してみました。

そんなことで初日から目をつけられました。そして予防注射の手違いでB型パラチフスの生菌を注射され、少年航空兵を含む五十人が発病、私も五十日間の入院生活を余儀なくされましたが、その後は第二期生と共に操縦訓練を受けました。

その訓練の終了後、南方をはじめ外地の戦隊に戦友たちは転勤されたのですが、私を含む五人の者は母校の宇都宮陸軍飛行学校の教官として残されました。銃も持たず、地面もはわず、半日は飛行訓練に明け暮れました。

我々の軍隊生活は痛快そのもの、疲れも苦しさも無く、正に天国の楽しさでした。最初から将校扱いされて、操縦者は鼓膜を破ると使い物にならなくなるからとビンタも禁止され、入隊前の出身校の教育の方が余程厳しく辛かったです。地上部隊の方には申し訳無く、気楽で幸せな軍隊生活でした。将来は空中戦、特攻等で死ぬ確率は地上

内生活、外へ出ると出会った兵隊の列が「歩調とれ、頭アー右」と敬礼をされ慌てたものでした。当初はなるべく彼等に出会わないように兵舎の裏などを通ったものです。

区隊長で陸士出の中尉クラスの教官も、「正直な話貴様らの教育方針はまだ決まっておらん」と言い、

「貴様等は学校で軍事教練は充分やって来ておるので、大詔奉載日の八日から飛行機に乗せる」と言われたのにはびっくりしました。

一週間は機体各部の名称、操縦時の発唱等を勉強し、八日から飛行機に乗せられました。教官はほとんど我々より下級の下士官で、教育態度も穏やかでした。私の番で約千メートルの高度に至ると、「操縦桿を前に押すと飛行機は下に向く、左に倒すと飛行機は左に傾く、やって見ろ」との言葉に、当日日本一の名声を馳せて高級機まで所有した県立厚木中学グライダー部五年間の経験から、教官の言う通りにやると「なんだお前は、好きな

部隊より多いことは覚悟していました。

昭和十九年末、サイパン島は陥落し、そこを基地として発進したB 29が単機または数機で、連日偵察飛行に来襲するようになりました。栃木県壬生教育隊の隊長が教官を集め、「敵機来襲の報せがあったらどの飛行機でもよいすぐに飛び乗って飛行場をすり鉢型に見る範囲を旋回し、敵機を見たらぶつかれ」という。私は高度五百メートルの受持ちでした。

そして数日後、空襲警報が発令され飛行機に飛び乗りました。「敵さんはB 29じゃ発見したらぶつかれ」との隊長の言葉と共に離陸し、私に指定された五百メートルの高度をすり鉢状に旋回していました。体当たりするか、撃ち落とされるか、何れにしてもこれが最後とはるか故郷の空に向かって機上から長々と挙手の礼を続けました。しかし三十分経っても敵機は認められずその日は着陸しました。

そして数日後再びの空襲警報に飛び上がって

ました。しばらくするとはるか上空に一筋の飛行雲を認め、その先に豆粒のようなB 29が飛んでいます。高度五百メートルの私からははるかに高い一万二千メートルの高度で、とてもあそこまでは昇れない。向こうから撃たれても当たらないと妙な安心感を抱いて見送っていました。

五百メートルから最高三千メートルまでとは中国戦線までの戦闘高度で、一万メートルを越える高度で来るとは隊長も考えていなかったでしょうし、当時の日本機ではそこまで上がって戦闘の出来る飛行機は無かったのです。この日以後、体当たり周回飛行は中止され、飛行機の地上爆破を避けるための空中回避に切り換えられました。空中回避で好きな所を飛んでいても、いっどこで撃たれるか飛行中の緊張感は始終捨て切れなかったのです。

過日、航空本部の高級将校が来て、B 29最初の来襲に際し、体当たり戦闘隊募集に「熱望」と書いた我々は残り、「希望せず」と書いた者が先に行

した。

六月を過ぎると、敵機動部隊の艦載機による航空基地攻撃が頻繁となり、格納庫、着陸照明施設などが破壊され、宝酒造の社長後継者であった大宮見習士官が機銃弾二発を受けて戦死しました。

このことは地元紙の「河北新報」が七日間にわたり学徒特攻隊の凄絶な訓練状況を写真入りで連載し、これを見た仙台市民から慰問の訪問が急増しました。

連隊本部が空襲を避けて宮城女学院に疎開していたので、飛行服のまま連絡に行く我々の仲間に、女学生から「特攻隊の兵隊さんの慰問に行きたいがどうしたらいいか」などの質問が多くなったのです。そして彼等は基地に行つて中丸少尉に頼めばいいと告げたため、私を名指しで同校専攻科の女性の訪問が多くなりました。

霞の目基地は元々通信省乗員養成所で民間飛行士の養成施設であつたために、守衛も整備員もほとんど民間人で、軍人は我々特攻隊員だけの間借

かされました。

その後昭和二十年二月末、壬生教育隊は閉鎖され、最後まで残つた教官十人のうち我々五人は、仙台霞の目飛行場に転勤させられました。そして数日後、特攻隊の募集があり、今度は再び「熱望」と書いた私と大塚少尉の二人が隊長室に呼ばれました。

そして「現在教育中の部下から操縦成績優秀な者を四人選び、六人編成で二隊編成せよ、追加の将校二人は後日指名する」とのことで、霞の目基地最初の特攻隊として翌日から凄絶な特攻訓練を開始されました。

私の隊と大塚少尉の隊が仙台市霞の目基地最初の特攻隊として編成されたのです。約二週間後、今度は希望を聞くことも無く、指名で後続の六隊が六人編成で組織され、八隊四十二人が残留し、主力の約百人は北海道八雲基地に移駐しました。残留特攻部隊は足立大尉を隊長として連日、日夜を問わず猛烈な急降下体当たり訓練が続行されま

りの形でした。そのため面会の出入りも比較的緩やかでした。私が面会許可係でしたが、ほとんどの者を入場させました。

宮城女学院は仙台でも筆頭の有名校でしたので良家の子女が多く、何日か来るうちにほとんどの女学生が部下の見習士官と懇意になつてしまったようです。見習士官も全部が大学専門学校の卒業生であるため、専攻科十九歳の女生徒にとつては適度の交際年齢であつたのです。しかしいづれ近い内に死ぬ宿命を持つ部下には清潔な付き合いをするように言い聞かせてはいました。そしてみな終戦まで清い交際をし、殺風景な隊内には明るく楽しい雰囲気がありました。

艦載機が飛来して兵舎は危険なため、約一キロほど離れた伊達興宗伯爵邸には東京から疎開した伊達一家一族が暮すようになりました。そして酒好きの興宗公夫妻と我々将校は、毎晩我々の持ち寄る酒を飲みながら楽しいひと時を過ごしました。二カ月に及ぶ伊達家滞在中、広島に原爆が落ち、

出撃待機中に終戦を迎えましたが、約半数は死亡した戦友達です。ご冥福を心からお祈り申し上げます。